

2. 留学生・海外留学相談部門

留学生・海外留学相談部門の活動対象は、1)一橋大学に在籍する留学生、2)留学生の支援や交流を希望する日本人学生、3)海外留学を希望する学生、及び4)留学生の問題を解決するために連携する教職員等である。2022年度の留学生・海外留学相談部門の業務は、国際教育交流センター教員（阿部仁、塚田英恵）、学生支援課所属の留学生アドバイザー（納谷裕子）、教務課所属の留学生アドバイザー（宮前美和子）が担当した。

留学生・海外留学相談部門の教員は国際教育分野における学生相談及び学生支援に携わっている。これらの業務は1)外国人留学生の相談に応じ、問題解決を図る「留学生生活相談」と、派遣留学や異文化交流研修参加のプランニングを支援する「海外留学相談」、2)外国人留学生の適応上の問題を未然に防ぎ、学内での異文化理解の認識を高める「オリエンテーション・留学生教育支援」、3)本学学生の留学を促す「海外留学の推進」、4)「国際学生宿舎における教育的な運営支援」、および5)海外留学や国際教育交流の理解を深める「授業の提供」の5つに分けられる。

「留学生生活相談」と「海外留学相談」とは学生と一対一の対面およびオンラインによるアドバイジングであり、問題解決から情報提供まで幅広い活動が含まれる。「オリエンテーション・国際交流支援」には、1)オリエンテーション・プログラムやガイドブックの出版、2)外国人留学生向けの、日本語による学習・添削支援、3)留学生と日本人学生向けのランゲージ・コミュニティの運営などがある。「海外留学の推進」には、1)学内留学フェアへの運営参加、2)派遣留学生向け渡航前オリエンテーション、3)「異文化交流研修（マレーシア、スペイン企業派遣）」の運営などが含まれる。「国際学生宿舎における教育的な運営支援」とは、宿舎アドバイザーとして主に学生スタッフに対して行う教育的指導を指す。さらには、異文化交流科目及び国際交流科目といった「授業の提供」を通じ、本学学生の異文化理解、学生国際交流、海外留学を促進している。

1. 留学生生活相談と海外留学相談

1) 相談室の開室日程及び担当者

学期中の相談室開室日は、春夏学期は2022年4月11日（月）～7月19日（火）、秋冬学期は2022年9月12日（月）～12月23日（金）であった。コロナ感染対策として、学生はオンラインと対面併用で授業を履修していたため、対面による相談時間を月曜日～金曜日の午前10時15分～午後1時15分に限定し、午後（午後2時30分～5時15分）はオンラインによる留学相談を表1の担当表に基づき実施した。

表1 相談室担当者の一覧（2022年度）

曜日	教職員
月	塚田 英恵
火	宮前 美和子
水	阿部 仁
木	宮前 美和子
金	納谷 裕子

夏期休業期間前後の7月20日（火）～9月10日（金）、春季休業期間前後の2022年12月27日（火）～2023年4月7日（金）は、午前10時15分～午後1時15分に開室したが、相談員の担当制度は、表1の曜日ごとの担当者制ではなく、相談員1名が必ず在室することを優先した柔軟な交代制とした。加えて2022年春季休業期間は、火曜日と木曜日の午後にはオンラインによるアドバイジング枠を新設した。

2) 相談状況の分類

① 相談件数、手段、および領域

図1は2022年度の月別相談件数である。年間で436件（昨年度390件）の相談を受け付けており、コロナ禍前のレベルに近づきつつある。以前は新生が入学する4月と9月に相談のピークを迎えていたが、2022年は6月の相談件数も増加した。これは特定の危機管理案件（23件）がこの時期に集中したことに起因している。

図1 2022年度月別相談件数

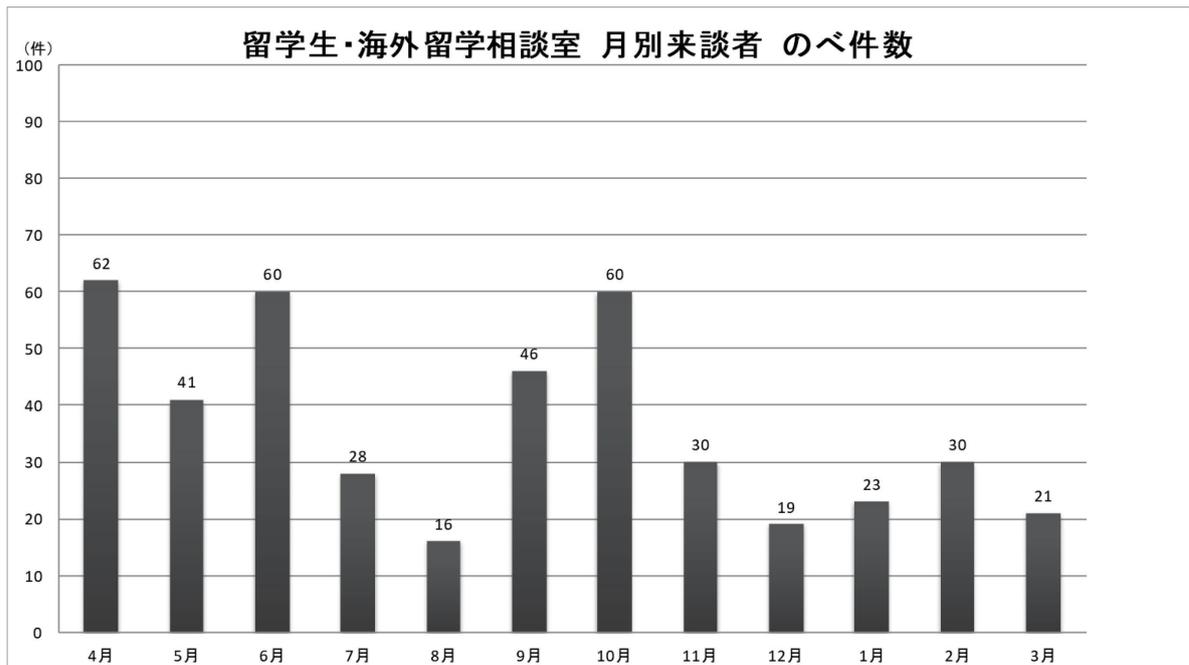


表2は2022年度と前年度の相談手段別件数の推移、表3は相談領域別件数と割合を示す。相談室では2020年度から対面による相談に加え、オンライン（ZOOMなど）方式での海外留学相談の提供を始めた。小規模クラスでの対面授業が復活した2022年度は相談室での相談が6割弱に上った。社会情勢に合わせて柔軟に学生相談を提供するためには、今後も対面と遠隔の二つの手段をバランスよく提供していくことが求められるであろう。

表2 相談手段別件数の推移（2021～2022年度）

相談手段	件数 (2021年度)	件数 (2022年度)	% (2022年度)
相談室・オフィス	224	292	67.0%
遠隔	166	144	33.0%
合計	390	436	100.0%

表3 2022年度 相談領域別来談者状況

相談領域	件数	割合
留学相談	268	61.5%
在留資格	55	12.6%
危機管理	23	5.3%
生活・適応	13	3.0%
ランゲージ・コミュニティ	11	2.5%
教育内容	9	2.1%
チューターマッチング	8	1.8%
健康（心理）	6	1.4%
進学	4	0.9%
履修	3	0.7%
宿舎・住居	3	0.7%
就職・進路	3	0.7%
オリエンテーション	2	0.5%
行事	2	0.5%
サークル	2	0.5%
アルバイト	1	0.2%
保証人	1	0.2%
地域	1	0.2%
異文化交流研修	1	0.2%
その他	20	4.6%
合計	436	100.0%

2022年度に件数が一番多かった相談内容は、「留学相談」（268件、昨年度201件）であった。後述するが、本学学生のアウトバウンド需要がコロナ前を超えるレベルに達し、相談件数が前年比で33%増加した。非定型な留学相談は一人あたりの相談時間が40分から50分程かかることが多いため、相談室アドバイジング時間の大半をこの領域に費やしているといっても過言ではない。

次に多かった相談領域は、留学生の在留資格に関する相談（55件、昨年度90件）であった。例年、卒業後に日本での就職を希望しているものの内定がまだ得られていない留学生が、卒業間際になって在留資格を「留学」から「特定活動」に変更するケースが3月に集中し、来談件数のピークが年度末に発生する。ただ、昨年度のようにコロナ対応で状況が刻一刻と変更するような混乱が収まり、ある程度計画通りに在留資格変更が行われたこともあり、来談件数は減少した。特定活動への在留資格変更は本学の卒業生や卒業予定の外国人留学生であり、オンラインでの相談が活用されやすい相談案件のひとつである。

他に多かった相談領域は前述した「危機管理」（23件）や、留学生の異文化適応に関わる「生活・適応」（13件）、健康（心理）（6件）であった。コロナ禍で社会とのつながりや生活様式が大きく変化した中、学業面や就職活動面、環境適応面で孤立しがちな学生への対応が発生した。これらは他の項目と比べると複数回の来談及び長時間を要するケースが多く、留学生相談室が窓口となり関係する学内・学外部門と連携しながら、留学生支援体制を提供した。

② 来談者別の内訳

2022年度に留学生・海外留学相談室を利用した来談者のうち、外国人留学生による相談は94件（昨年度90件）であった。日本人学生による相談は275件（昨年度201件）、教員は13件（昨年度10件）、職員は22件（昨年度34件）であった（表4）。日本人学生による相談のほとんどは派遣留学に関する相談であった。

表4 2022年度 来談者の内訳

来談者	件数	内訳	%
外国人留学生	94		21.6%
(内訳)			
学部生		26	
修士課程		54	
博士課程		4	
研究生		1	
日研生		0	
交流学生		1	
その他		4	
日本人学生	275		63.1%
(内訳)			
学部生			
修士課程			
博士課程			
その他			
教員	13		3.0%
職員	22		5.0%
卒業生	11		2.4%

外部・地域	7	1.6%
その他	14	3.2%
総計	436	100%

2. オリエンテーション・留学生教育支援

1) 新入外国人留学生オリエンテーション プログラム

2022年4月および9月入学の学部生、大学院生、研究生、交流学生を対象に留学生オリエンテーションを日本語及び英語で行った。新型コロナウイルスの影響を受けながらも外国人留学生の入国制限が緩和されたため、4月入学の正規留学生181名（学部生35名、大学院生146名）へのオリエンテーションは、すべてをオンデマンドで実施した。春学期に来日予定の学部交流学生44名へのオリエンテーションは2022年3月25日にオンライン形式で開催し、交流学生はその後準備が整い次第4月から5月にかけて入国し、一橋での対面授業に順次合流した。

秋学期には渡日した交流学生164名（学部生132名、大学院生32名）に対し、オリエンテーションの概要説明を8月31日に、学生生活および在留資格オリエンテーションを9月2日に対面形式にて開催した。

2) 外国人留学生向けの、日本語による学習・添削支援

センターには外国人留学生の日本語による履修や研究を支援する3つのチューター制度がある。授業期間中を通して大学院生チューターが勤務しており、本学に在籍する留学生なら誰でも利用できる「日本語添削チューター」が添削支援サービスの中心である。これに対して、1対1のペアからなる個別チューター制度は、留学生の修学ステージに応じて期間限定で利用できるサービスである。個別チューター制度のうち、「論文チューター制度」は、修士論文や博士論文を執筆している大学院課程の留学生を対象とする。また「初年度チューター制度」は、入学して一年目の留学生（学部生、大学院生、研究生、交流学生）を対象とし、留学生が日本語で円滑に専門科目の学習・研究を進められるよう、チューターが個別に支援を行う。

A) 日本語添削チューター（オンライン）

日本語添削チューターは、留学生の論文やレポートなどの日本語を大学院生のチューターが添削する。過年度の経験から、日本語添削支援とリモート会議ツール「Zoom」の親和性は高く、リモート環境においても日本語添削サービスのクオリティを維持することができることが分かったため、2022年度もオンラインでの添削サービスを提供した。その結果、春夏学期（2022年4月11日～7月29日）にはのべ185回、秋冬学期（2022年9月12日～2023年1月31日）にはのべ287回、年間でのべ472回（昨年度529回）、外国人留学

生がオンライン日本語添削サービスを利用した。例年、秋冬学期は年度末の論文やレポート執筆対応で利用者が大幅に伸びる傾向にあるため、11月から1月にかけてチューター枠を週12枠増設して対応した（表5）。

表5 2022年度 日本語添削オンライン 利用実績

月	利用回数	チューター 枠数	稼働率	備考
2022年4月	21	90	23%	
2022年5月	45	126	36%	
2022年6月	71	129	55%	
2022年7月	48	111	43%	
2022年8月	0	0	--	夏季休暇中活動休止
2022年9月	31	81	38%	
2022年10月	69	108	64%	
2022年11月	47	150	31%	追加枠設定
2022年12月	92	144	64%	追加枠設定
2023年1月	48	150	32%	追加枠設定
合計	472	1089	43%	

今年度末に利用者アンケートを実施した結果、日本語の文法や表現のチェックに役立ったと概ね好評の評価が得られた。本サービスが利用者の役に立っていることは、同じ利用者が繰り返し利用している傾向からも窺える。また、利用者アンケートでは、チューター枠は現在45分間であるが、その時間を延長して欲しいとの声も上がった。これまで日本語添削チューターの利用は、一人一日一回までという制限を設けてきたが、今年度の9月と10月には試験的に、一日に二回まで予約を可能にすることで、チューター枠の時間延長の要望に対応した。しかし、繁忙期に入った11月からは、チューター需要のひっ迫を防ぐため、チューター利用回数を一人一日一回までに制限した。しかし、稼働率の一年の平均が43%にとどまることから、今後、利用者のニーズに応える方策を検討するとともに、より多くの留学生たちに本サービスの利用を呼びかけることが課題であるといえる。

B) 論文チューター

2022年度は33名の大学院留学生(昨年度32名)が論文チューター制度を利用した。留学生の修士論文や博士論文をチューターが個別に添削する制度で、論文チューターの主な業務は内容の修正ではなく、論文の日本語に対して添削等のアドバイスを行うことである。

また、日本語教育部門と協力しながら、任期中の論文チューター向けのワークショップを開催し、作業工程管理や日本語添削スキル向上が目指せる環境を整えている。ワークショップの企画には、日本語添削チューターの経験や国語教員として教育歴のある大学院生三名をコーディネーターとして秋学期に採用し、ワークショップ開催に向け準備を重ねた。

ワークショップは、これまで一年に一回だけの開催で、前年度は新型コロナウイルスのため、オンライン開催であったが、本年度は対面開催とし、論文チューターの参加の機会を拡大するために、10月と12月に二回、同内容のワークショップを開催した。その結果、10月には8名、12月には9名、計17名のチューターが参加した。ワークショップでは、特に論文チューター初心者に向け、添削のテクニックや心構えを共有し、チューター間での悩みや課題を話し合うことのできる場を提供した。

参加者の事後アンケートでは、とりわけ、日本語部門の教員による日本語の文法を確認するためのオンライン・ツールの使い方や添削の例などを示したスキル講座が好評であったことが分かった。その一方で、「正解」というものがない添削作業に関して、一度限りのワークショップで習得できることが限られるため、ワークショップ開催の意義について再検討するほか、チューターの悩みを解決できるようなワークショップの内容に改善していく検討も求められている。

また、前年度の論文チューターから、添削活動を行う中で出てきた疑問や悩みを相談する「駆け込み寺」の設置が提案されたことから、今年度は、コーディネーターが試験的にGoogle フォームを使った「駆け込み寺」を設け、投げかけられた質問や相談に対して、コーディネーターたちが可能な範囲で応じる体制を作った。しかし、結局、利用者は一人もおらず、「あると助かる」と思われることと、実際の必要性のギャップが明らかになった。

C) 初年度チューター

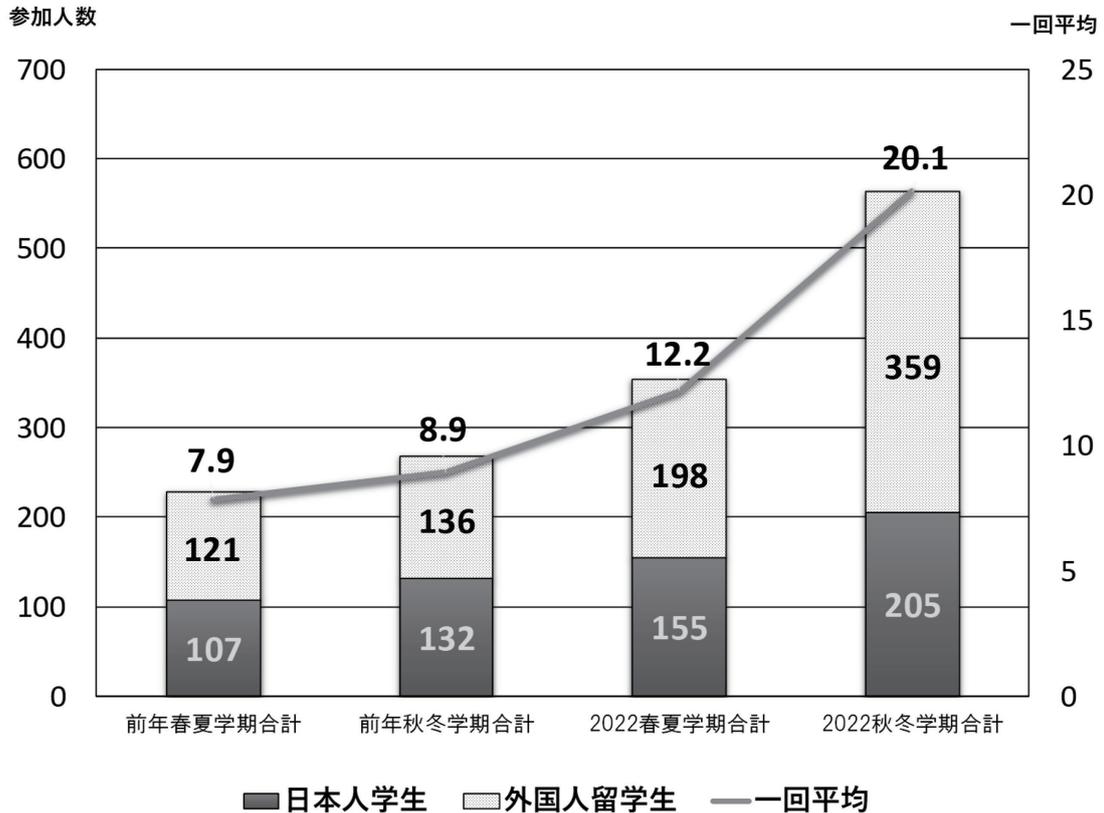
2022年度は10名（昨年度12名）の外国人留学生が初年度チューター制度を利用した。初年度チューター制度とは、一橋大学に入学して間もない留学生の日本語による学習や研究を支援するもので、授業で分からなかった日本語の解説や、ゼミの専門的内容の解説、日本語でのレポートやレジユメの書き方などを一対一のペアでチューターが指導を行う制度である。初年度チューターは留学生自身がチューター候補者を探してペアを組めることが望ましいが、候補者が見つからない留学生に対しては教務課でチューター志望の日本人学生を募集し、留学生に紹介を行っている。

3) ランゲージ・コミュニティ

一橋大学ランゲージ・コミュニティ（Language Community : LC）とは、一橋大学の外国人留学生と日本人学生との相互語学学習と異文化交流を目的とした活動である。2010年の活動開始から、今年度で12年目を迎えた。2022年度はLCを担当する学生コーディネーター4名がその運営と実施を担当した。5月からは開催方法を対面形式に変更し、毎週火曜日と金曜日の昼休み（12:30～13:15）に学生が国際研究館1階のラウンジに集まれるようになり、言語交流を通じた「学生たちの居場所づくり」が2年ぶりに復活することとなった。学生コーディネーターは日本語および英語による会話テーブルに集まる15～20

名ほどの参加者のファシリテーターとして、参加者の希望や関心事に沿った話題を提供した。

図2 ランゲージ・コミュニティ稼働状況（2021-2022年度）



前年度からの課題として LC の存在自体を知らない学生がいまだに多いことが挙げられていた。そのため、2022年度には外国人留学生オリエンテーションで LC 紹介セッションを設け、プログラムの周知を図った。加えて、PACE 教員を通じ学部新一年生に LC 紹介ポスターの配布を行った。その結果、渡日した交流学生の増加、対面方式の再開、各種宣伝効果が相まって、2022年度春夏学期の LC 平均参加人数は 12.2 人（前年度 7.9 人）、秋冬学期は 20.1 人（前年度 8.9 人）となり、前年同期比で大幅増加した（図 2）。業務規模拡大に伴い、秋冬学期にはコーディネーターを 4 名体制から 7 名体制に増強して対応した。

3. 海外留学の推進

コロナ禍の鎮静に伴い、海外派遣留学制度、海外語学留学（英語）、異文化交流研修は 2022 年度すべて予定通り実施された。各プログラムの参加人数推移は以下の通りである（表 6）。2022 年度の派遣留学者数は 142 名で、前年度（112 名）に比べ大幅増となった。留学生・海外留学相談部門では、本学の留学希望者に対する相談業務に加えて、A) 異文

化交流研修の運営、B) 派遣留学生向けの渡航前オリエンテーション プログラム、C) 学内留学フェアへの参加を通じ、海外留学の推進を支援した。

表 6 留学生・海外留学相談部門が関わる海外留学プログラムの派遣学生数の推移(単位・人)

派遣年度	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
派遣留学（派遣数）	63	74	95	111	107	106	99		112	142
グローバルリーダー	2	2	2	1	2	3	3		3	3
オーストラリア	20	12	17	7						廃講
香港	6	2	8	9	7	10	12			休講
スペイン企業派遣	6	6	6	6	6	6	6			6
マレーシア					18	15	17			16
合計	97	96	128	134	140	140	137	0	115	167

1) 異文化交流研修（香港中文大学、スペイン・ベルヘ社、マレーシア工科大学）

異文化交流研修は異文化における政治経済、環境、ビジネス課題に触れる過程で多角的な視点を身につけ、また「アウェーで実力を発揮できる自信」を体得することを目的としたプログラムであり、一橋大学派遣留学制度の前段階及び後段階として、本学の学生が海外留学を体系的、段階的に経験できる仕組みの一部を担っている。2022年度は異文化交流研修マレーシア工科大学およびスペイン企業派遣の2本を催行した。しかし、香港プログラムは政治状況が不安定であることから引き続き休講となった。オーストラリアプログラムは、モナシュ大学の組織再編に伴いプログラム提供元が消滅したため廃講となった。

異文化交流研修（スペイン企業派遣）はマドリッドに拠点を置く総合商社ベルヘ社と、一橋大学、韓国中央大学の三者連携による企業派遣プログラムで、本学におけるプログラム運営は国際教育センター教員の阿部仁が担当した。2022年度は冬季休業期間の2023年2月1日～3月13日（5週間）に6名の学部生が参加し、韓国中央大学の学生6名と一緒に5週間にわたる企業実習、マネジメント研修、スペイン語研修、在マドリッド日本大使館訪問などを通じ、国際ビジネス環境において「アウェーで実力を発揮できる自信」を体得すると同時に、日韓学生交流を通じて相互理解を深めた。

今年度で4回目の開催となる東南アジアでの異文化交流研修は、東南アジアを舞台としながらグローバルに活躍するスキルを身につけること、また、グローバルな実践とローカルな価値観が絡み合う多文化的な環境におけるコミュニケーション・スキルについて実践的に学ぶことを目的とした体験型研修である。これまで本研修は、マレーシア工科大学のジョホールバル・キャンパスとシンガポール経営大学で行われてきたが、新型コロナウイルス感染症による中断を経て三年ぶりの開催となった2022年度からは、研修先をマレーシアに絞り、マレーシア工科大学のクアラルンプール・キャンパスとジョホールバル・キャンパスでの研修へと変更した。2023年2月19日から3月11日の3週間にわたって研修を実施し、渡航前授業前も含めて、担当教員である塚田英恵と太田浩（全学共通教育センター）

がプログラム開発と運営を担当した。本年度は、商学部、経済学部、社会学部、法学部から計 16 名の学生が参加した。

研修最初の三日間は、クアラルンプールにてマレーシア日本国際工科院やマレーシアの環境庁への訪問などを行い、その後、マラッカでの歴史視察を経てからジョホールバルに渡り、プロジェクト型研修を通して持続可能な経済発展のあり方を学び、グループ発表で締めくくった。三週間の研修を通して現地学生と学びをともにして異文化交流を深めることができたほか、後半 2 週間のジョホールバルでの研修には、立命館大学からの参加者が 6 名加わり、日本の他大学の学生との交流も図ることができた。

本年度は当初、クアラルンプールで企業訪問が予定されていたが、渡航直前にキャンセルとなり、同企業の工場をオンラインで見学するバーチャル・ツアーに切り替わった。来年度からは、グローバルなビジネスを現地で展開する企業を実際に見学し、関係者から直接話を伺える機会を実現することで、本研修の新たな研修地であるクアラルンプールでの研修をより一層充実したものにすべく、マレーシア工科大学の担当者と検討を始めている。

2) 派遣留学生向け渡航前オリエンテーション

2022 年度の派遣留学関連プログラムは新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けつつも、夏出発から段階的に再開する運びとなった。渡航前に行う異文化適応オリエンテーションにおいて、留学に必要なコンピテンシー（能力）の考察を目的としたワークショップを実施した。今年度も学生が現在の自分のコンピテンシーへの理解を深められるように、事前に一般社団法人行動特性研究所の『行動特性診断テスト』を受検し、オリエンテーションに講師を招いてその結果について解説し、グループでディスカッションを行った。異文化環境の中で目標に向かって行動するために必要なコンピテンシーとそのコンピテンシーにおける自分の強みと弱みを理解し、コンピテンシーを向上させるために何をすべきかを議論した。

留学に必要なコンピテンシーは、①コミュニケーション能力、②問題解決力、③グローバルな環境で取り組む姿勢、④留学先の授業で必要な行動の 4 つである。さらに、これら 4 つのコンピテンシーに加え、⑤ディレールメント（留学生生活を阻害する可能性のある行動）についても取り上げ、その構成要素である行動特性の測定結果を踏まえ、自らの行動を変化させることによって、コンピテンシーを向上させる為の目標を設定した。オリエンテーションの後半で、行動特性診断テストの結果から気づいた点に基づき、留学中に伸ばしたいコンピテンシーを選び、留学中の過ごし方に関する目標を立てて、お互いに発表する場を設けた。課題として、さらにその目標を深めて、オリエンテーション終了後一週間以内に manaba から提出することを課題とし、留学期間中にいつでも目標を確認できるよ

うにした。異文化オリエンテーションは夏出発向けにはオンライン形式で、冬出発向けには対面形式で合計二回実施し、派遣留学予定者の大多数が受講した（表7）。

表7 渡航前オリエンテーション実施状況

	実施日・期間	参加学生数
異文化適応オリエンテーション （夏出発向け オンライン形式）	2022年6月22日	104名
異文化適応オリエンテーション （冬出発向け 対面形式）	2022年11月30日	30名

3) 学内留学フェアへの運営参加

2022年度は海外留学希望者への留学制度説明と留学準備促進を目的とした海外留学フェアを対面形式で4月27日（水）と9月21日（水）の2回開催した。4月の第1回留学フェアには81名が参加、9月の第2回フェアには91名が参加した。相談室教職員は参加学生に対して個別の留学相談を提供したほか、3年ぶりに復活する「異文化交流研修」（スペイン企業派遣およびマレーシア工科大学）の説明会を実施した。

4. 国際学生宿舎における教育的な運営支援

小平国際学生宿舎及び国立国際交流会館では、多様な寮生をサポートするために多くの学生アシスタントが寮運営に携わっている。宿舎の学生アシスタントには、学生寮全体の運営を支援するレジデント・アシスタント（RA）と小平国際学生宿舎の共用6人部屋の班長であるコミュニティ・アシスタント（CA）があり、これら学生アシスタントを支援する宿舎アドバイザーとして、留学生・海外留学相談部門の教職員が相談室業務の一環として1) 学生宿舎スタッフの採用支援、2) 国立国際交流会館の寮運営支援、3) 国際学生宿舎一橋寮（小平キャンパス）の寮運営支援を行った。

1) 小平国際学生宿舎寮組織（ISDAK）の寮運営支援

2022年度のISDAKの執行部チームは、本学30名のRAに加え、東京学芸大学4名、東京農工大学2名の計36名で構成された。大規模寮を運営するためにRAが組織立って機動しており、基本業務として「1. フロアの寮生サポート」、「2. 班活動」、「3. ISDAK イベント」の領域をそれぞれ担っている。「1. フロアの寮生サポート」とは、いわばRA活動の基幹となる業務であり、RAはそれぞれ自分の担当フロアを持ち、担当する寮生にきめ細かいサポートを提供している。2022年度の小平国際学生宿舎におけるISDAKの管轄エリアは、【共用タイプ（6室）×35フラット】と【個室タイプ（8～22室）×47フロア】の合計82フロアであり、これらを36名のRAおよび共有部屋に住む34名のCAで担当した。次に「2. 班活動」であるが、これはISDAKの組織運営に関する業務で、RAはそれぞれ

の資質及び得意分野に基づき、班決定を行う。班活動はその活動期間から短期系班と通年系班の2つに分類され、RAはそれぞれ短期系1つ、通年系1つの計2つの班に所属することになる。「3. ISDAK イベント」には、月例イベントや学期開始時や学期末時に開催されるパーティーがあり、寮内での交流を促進した。宿舎アドバイザー（阿部）はRA、職員および管理オフィスとともに以下の定期会合に参加して、寮運営上の相談・指導・助言を行った（表8）。

表8 ISDAKにおける宿舎アドバイザー活動

	宿舎定例会 (毎月第三火曜日)	RA会議 (毎月第一土曜日)
2022年度	4月, 5月, 6月, 7月, 9月, 10月, 11月, 12月, 1月, 2月	4月, 5月, 6月, 7月, 10月, 11月, 12月, 1月, 2月, 3月

2) 国立国際交流会館の寮運営支援

2022年度、国際交流会館では6名の学生がレジデント・アシスタント（以下RA）として居住し、異文化環境で生活する留学生のサポートに努めた。RAは、宿舎アドバイザー（塚田）、会館職員2名、学生支援課との連携のもと、各フロアと家族棟を担当し、日常的に会館に居住する留学生の生活サポートを行った。

RAは、学内のコロナ感染防止ガイドラインを守りつつ、月例フロア・ミーティングを学外で実施したり、オンラインと対面を併用したウェルカム・パーティーや、スポーツ大会を行ったりしながら居住者間の親睦を深めた。そして、2月には、屋外で調理した焼肉を屋内で着席したかたちで会食するという焼肉イベントを行い、イベント開催への制約が続いたコロナ禍3年目を多くの寮生とともに楽しく締めくくった。

宿舎アドバイザー（塚田）は、月例のスタッフ・ミーティングやイベントに参加し、寮関係者との親睦を図りながら寮運営上の相談・助言を行うほか、会館職員やRAの日々の活動における問題や課題に耳を傾け、RA活動の見直しを行う話し合いの場を設けるなどのサポートも行った（表9）。

表9 2022年度の国際交流会館におけるアドバイザー活動一覧

月	イベント	会議・面談
4月	ウェルカム・パーティー、あすなる総会 (対面・オンライン)	スタッフ・ミーティング
5月	HOUSE 会議（オンライン開催。RA 代表が発表）	スタッフ・ミーティング、会館職員 面談
6月	バドミントン大会	スタッフ・ミーティング
7月		スタッフ・ミーティング
8月		RA 個別面談

9月	あすなろ総会、バドミントン大会	スタッフ・ミーティング、会館職員 および RA 代表と後期運営打ち合わせ
10月		スタッフ・ミーティング
11月		スタッフ・ミーティング
12月		スタッフ・ミーティング
1月		スタッフ・ミーティング
2月	焼肉イベント	
3月	フェアウェル・パーティ (RA 退任者への 記念品贈呈とスピーチ)	スタッフ・ミーティング

3) 学生宿舎スタッフ (RA・CA) の採用支援

国際学生宿舎のレジデント・アシスタント (RA) とコミュニティ・アシスタント (CA) 制度が抱える課題として、卒業・留学等によるスタッフ退任に伴う人員確保があげられる。例年、4月と9月に退任する RA・CA の後任補充を (4月採用は10月から、9月採用は5月から) 行っているが (交流会館については4月採用のみ)、コロナ以前から課題となっていた人員確保はコロナ禍では特に目立った課題となっている。理由として、コロナ以前は、留学に行く学生を除くと卒業まで活動を継続する RA・CA がほとんどであったのに対し、コロナ禍では様々な理由で1年などの短い期間で退任する RA・CA が一部であるが増えている。オンライン授業の導入により、寮を出て国内外の実家に戻るスタッフが出てきたこともその原因の一つだが、中には RA・CA 活動がイメージしていたものと違った、学業との両立が難しくなった、留学生とコミュニケーションを取る際の英語力に不安がある、パートナーと寮外に住む等という理由で退任するスタッフも見られた。その中には、5月と10月に行う活動継続を確認するための面談ののちに退任を申告する者もいた。そのため、選考期間外に採用面接を1回行った。コロナ前は交流イベントの企画・運営や多数の新入留学生のサポートなど華やかな活動が中心だったのに対し、コロナ禍では活動内容が以前と比べて大きく変わっていることが原因だと考えられる。来年度の課題として、長期化するコロナ禍での RA・CA 活動の在り方、やりがいを見出す方法を学生スタッフやハウスマスターと一緒に模索していきたい。

反対に、コロナ禍で RA・CA 活動に対する新たな需要が出てきていることも確認されている。今年度の RA・CA 採用面接では、特に1・2年生の志望動機として「コロナ禍で他の課外活動や交流活動ができていないため」「入学したのち留学生との交流の機会がないことに焦りを感じた」と話す学生が多かったことが印象的だった。また、3・4年生の中にも、留学の予定が中止となり、国際交流の機会を求めて RA・CA を志望する学生が見られた。コロナ禍で学生同士の交流の機会が減っているなか、寮や RA・CA 組織は学生にとって重要なコミュニティになっていることを再認識させられた。昨年度に続き、コロナ禍での広報活動を工夫できたおかげで、結果として今年度も多数の応募が集まった。コロナ禍

ではオンライン主体で実施した募集説明会だったが、今年度は対面形式で行った。今期も広報活動・説明会の開催から書類選考・面接の実施まで、採用に関わる様々な業務を学生スタッフとハウスマスターと協力して行うことができたおかげで、来年度に向けて大変有能な新スタッフを確保することができた。

昨年度までは、RA・CAのポジションは表10で見られるように、派遣留学から帰国した学生が力を発揮できる場として注目を集めていた。以前は、志望動機として、自身が留学生として海外で過ごした際に現地の学生寮スタッフなどに支えてもらった経験から、今度は自分が日本に留学に来る学生のサポートをしたいと語る応募者が多数みられた。また、例年であれば、国際学生宿舎のRA・CAとして活動していた学生が派遣留学生として海外に飛び立つ事例も多かったが、コロナ禍では、各国への派遣留学が全面中止となり、留学を予定していたスタッフが留学に行けない代わりにRA・CA活動を継続するケースが多かった。しかし、2022年の夏から7名の学生スタッフが派遣留学の為退任し、2023年の夏には派遣留学で3名のスタッフが退任予定である。社会全体でもコロナ前の体制へ戻る段階に移行しており、本学との派遣留学先協定校数も数を増やしている。今後も引き続き派遣留学準備生・帰国生との連携強化により、国際交流に高い関心を持った学生スタッフの確保を図っていきたい。

表10 派遣留学制度と国際学生宿舎学生スタッフ採用の関連性

年度	RA 新規採用数		CA 新規採用数	うち派遣 留学経験者	派遣留学による 学生スタッフ退寮
	小平	国立	小平		
2015	10	4	19	(8)	4
2016	21	1	14	(7)	8
2017	15	3	26	(8)	4
2018	16	4	17	(5)	7
2019	12	5	22	(8)	9
2020	7	4	19	(5)	0
2021	13	4	25	(0)	2
2022	19	3	17	(3)	7

5. 授業の提供

留学生・海外留学相談部門が担当した学部生向けの国際教育関連授業は表11の通りである（言語社会研究科の大学院生向け授業については日本語教育部門の報告を参照）。

表 11 国際教育関連授業の実施状況

1. 国際交流科目

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	開講時期・ 単位数
Explore Japan (阿部)	2コマ ／週	交流学生	講義や体験学習、見学などを通して日本社会の理解を深め、あわせて日本文化への適応スキルを習得した。	春夏学期 秋冬学期 各2単位

2. 全学共通教育 異文化交流科目

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	開講時期・ 単位数
海外留学スキル・トレーニング (塚田)	1コマ ／週	学部生	海外留学希望者を対象に、異文化間コミュニケーションのほか、異文化・多文化の環境における権力関係の考察を通して、海外で実力を発揮するために必要な、クリティカルな社会的意識と主体性を構築した。	春夏学期 2単位
異文化交流研修（スペイン企業派遣） (阿部)	1コマ ／週	学部学生 大学院生	春季休業期間中に5週間、マドリッドに拠点を置く総合商社ベルヘ社と一橋大学との共同運営による企業実習（英語）を通じ、文化の違いを越えて協働する力を蓄え、アウェーで実力を発揮できる自信を体得した。	秋冬学期 7単位
異文化交流研修（春季・マレーシア工科大学） (塚田)	1コマ ／週	学部学生 大学院生	前半1週間をクアラルンプールとマラッカ、後半2週間をジョホールバルに滞在し、現地の学生との交流やプロジェクト学習を通して異文化間コミュニケーションを体得したほか、環境保護を考慮した経済発展のあり方を学んだ。	秋冬学期 4単位

（文責、集計：阿部仁／編集：塚田英恵・納谷裕子・宮前美和子）